

「朝鮮旅行」という経験と「親しみ」の構造

—同志社女子専門学校1925・1927年旅行に注目して—

宇都宮めぐみ*

meg_utsunomiya@yahoo.co.jp

Contents

はじめに

I 近代女子教育と「朝鮮・満洲」旅行

- 1.1. 旅行の意味付けについて
- 1.2. 同志社女子専門学校における長期旅行と「朝鮮・満洲」

II 女子学生達の朝鮮旅行

- 2.1. 旅程と主な行き先
- 2.2. 音楽会の開催と「植民地近代」
—柳宗悦・柳兼子の思想と活動に触れて
- 2.3. 人々と出会う、出会いを記す

III 「親しく接する」という経験のゆくえ

- 3.1. 「朝鮮の人々」とは誰か
- 3.2. 朝鮮を「愛す」ることと、日本人であること

おわりに

Abstract

本論文では、同志社女子専門学校の1925年・1927年朝鮮旅行とその旅行記を手がかりに、「朝鮮の人々と自然に親しく接する」という旅行目的に注目して、植民地観光について考察を行う。「海外移住」をすすめるために、「無理解から理解」への旅として設定された近代日本の植民地観光旅行。しかし、柳宗悦・柳兼子が引率を行った旅行は、そのような方向性とは一線を画そうとしていた。柳夫妻が行ってきた音楽会事業に女子学生達もともに参加し、柳夫妻の姿勢や「親しく接する」という旅行の目的もあり、通常の観光旅行では出会えない可能性のある人々との多様な出会いを経験した。それを通して、日本の朝鮮支配に対する否定感を示すとともに、自身をも揺るがす視線を得た学生もおり、それらを旅行記文集『朝鮮旅行記』の記述をもとに紐解いた。近代日本の植民地観光とは何であったのか、その議論のための一試論として、この事例を紹介したい。

* 東亜大学校国際学部 近代史。

本稿は、平成22年度日本学術振興会の研究助成(優秀若手研究員海外派遣事業含む)および文部科学省科学研究補助金(特別研究員奨励費)による成果の一部である。

Key Words : 朝鮮旅行、旅行記、女子学生、「自他」認識、柳宗悦
(Tourism to Korea, Tourism writing, Girl students, Recognition
of 'Others and myself', Yanagi Muneyoshi)

はじめに

私達の今度の朝鮮旅行は、一方朝鮮の人々と自然に親しく接すると共に、朝鮮の古代美術を鑑賞しやうと云ふのが大きな目的であった。(今井綾子『慶州の部』『朝鮮旅行記』1927年10月)

私達の今度の朝鮮旅行は、一つは、朝鮮の自然を見、他は朝鮮の美術を鑑賞しよう
と云ふ事であった。(今井綾子『慶州の部』『同志社女学校期報』52号、1927年11月)

近年の「文化交流」の成果か、少なくとも私が初めて訪れた2001年頃と比べると、日本から見た朝鮮半島、とりわけ韓国は格段に「近く」なったようである。飛行機で二時間、二泊三日で数万円！と銘打つパックスツアーは数多あり、人々はそれぞれの目的にそって旅立つ。まるで急に「近く」なったかのように。

本稿では、観光旅行(tourism。以下、旅行と書いた場合、とくに断りのない場合はこれを指す)について、それがかつての日本と朝鮮半島とをめぐって、いかなる役割を果たし、経験されていたかを明らかにすることを旨とする。観光旅行は、近年、「帝国日本」と植民地をめぐる議論において重要なトピックの一つとして検討されつつあるが、そもそもメディア・イベントとしての旅行とは、それが成立してからここ100年ほど、根本的なところは変わっていないと言えるだろう。「観光への期待はあらかじめ作られており、旅行はその期待を期待通り実現し、満足を与えるものになった」¹⁾のである。開港以降、欧米から見られる立場であった日本人が、日露戦争とその勝利という状況のなかで海外観光を行うよう

1) 有山輝雄(2002)『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館、p.7。有山は団体観光旅行の始まりとして、1906年に朝日新聞によって企画・実施された「満韓巡遊旅行」や1908年の世界一周旅行などを挙げている。

になったことは、自身を見られる主体から見る主体へと変えようとしたものであり、それは「帝国民・文明国民」²⁾として振る舞い、見られようとしたことでもあると、有山照雄は述べている。

日本の先行研究では、とくに「朝鮮」や「満洲」³⁾を巡る観光旅行の構造的問題が鋭く問われてきたと言え、その問題意識や説得力のある議論は積極的に評価しうるものである。⁴⁾一方韓国でも近年、近代の消費文化としての観光、その対象としての朝鮮という側面からの調査・研究が行われており、これまで行われてきた日本人旅行者による旅行記分析のみならず、『旅行案内記』などに関する具体的事例の発掘などが、都市史研究の側面ももちつつ盛んになされつつある。⁵⁾本稿では示唆に富むこれらの研究に多くを負いつつ、朝鮮を巡る旅行とは何であったのかという問題を、冒頭に挙げた引用文を手がかりに考えてみたい。

引用した二つの文章は、1927年(昭和2⁶⁾)に朝鮮を旅した一人の女子学生の名で掲載された旅行記⁷⁾の始まりの一文である。同志社女子専門学校(現在の同志社女子大学。以下、同志社女専とする)の英文科三年に在籍していた彼女は、卒業を翌春に控えた10月、柳宗悦と、その妻であり、声楽家の草分けとして日本と朝鮮半島などで活躍した柳兼子に引率されて、60数名の同級生とともに朝鮮を訪れた。

二つの文章のうち前者は、ワラ半紙刷りで文集の体である冊子『朝鮮旅行記』(1927年10月発行)⁸⁾に掲載されたもので、この冊子は恐らく学内の関係者向け

2) 有山(2002)参照。

3) 現在用いられていない歴史的用語という意味では、「朝鮮」、「満洲」ともに括弧付きで用いるべきであるが、煩雑さを避けるため以下省略する。

4) 日本の対外膨張と大衆の「帝国・国民」化を満洲観光から論じた高媛、さらに朝鮮も加えた朝鮮・満洲ツーリズムを分析した荒山正彦、東京・奈良女子高等師範学校の1939・1940年『大陸旅行』などから戦時下ツーリズムを分析した長志珠絵など。

5) 『旅行案内書』の分析に関しては、서기재・2002、同2009、具体的事例として慶州を取り上げて論じたものとして、中根隆行(2009)、また旅行と表象に関しては、박찬승編(2010)、朝鮮旅行の全体像を捉えようとしたものに、부산근대역사관・2010などがある。

6) 元号は、以下省略する。なお、大正は1912年7月30日から、昭和は1926年12月25日からである。

7) ツーリズムの記録(ツーリズム・ライティング。本稿では旅行記とする)は、「多様な形式を持つが、共通して日本語の読み手に向けた異文化への眼差し・娯楽・余興への欲望を誘」(長(2008)、p.339)とされており、異文化観や自他表象をめぐる議論において重要な意味を持つ。

8) 『朝鮮旅行記』(同志社女子大学史料室蔵)は学内史料であるため、以下引用する際、今井綾子「慶

に作成されたものであると推測される。一方後者は、同志社女学校が毎年発行していた学友会・同窓会誌『同志社女学校期報』(以下、『期報』とする⁹⁾)の52号(1927年11月発行)に掲載されたものであり、同誌は学外への広報誌的役割も担っていたため、ほぼオフィシャルなものと捉えて差し支えないだろう。『朝鮮旅行記』は、外部に発表されることが想定されていないためか、形式・視点ともに比較的多様な文章が掲載されており興味深い。そして、ここでまず注目しておきたいことは、両者に掲載されている今井綾子の旅行記から、『朝鮮旅行記』に掲載された旅行記をベースとして『期報』52号掲載の旅行記が作成されたということが推測できる点である。¹⁰⁾そしてこの点から先の二つの文章を比べてみて重要なことは、前者の『朝鮮の人々と自然に親しく接する』という言葉が、後者では『朝鮮の自然を見』と、切り縮められていることである。つまり、『人々』という言葉が脱落し、『親しく接する』が『見る』に変更されており、これは些細な単語の変化ではあるが、容易に見過すことができない。

「親しく接する」とは何なのか。旅行の記録としてオフィシャルな媒体を通して人々に提示される時に脱落してしまったそれは、一体どのようなものだったのか。本稿はこの問いを通して、近代日本における植民地観光の意味を考えることとしたい。

支配的立場にある人々が、被支配的立場にある人々や彼ら彼女らの生きる土地、生み出す文物に近付き、ある種の関心や愛着を持って接しようとすることは、『帝国』の内部において様々なレベルで繰り返されてきたことであり、その欺瞞性は多くの先行研究が指摘してきたことである。ましてや、柳宗悦と関わっては、『心からの敬念と親密の情』¹¹⁾、『信頼と情愛』¹²⁾などの言葉で表された思想

州の部』以外の執筆者名はイニシャル表記とする。

9) 同志社女学校は例年11月～12月に学友会・同窓会誌『同志社女学校期報』を発行していたが、同誌には毎号、学生によると思われる旅行記や体験記が掲載されており、同校が1925年～1930年に行った朝鮮・満洲旅行についても、51・52・53・55号にそれぞれ掲載されている。

10) 『期報』掲載旅行記の目次上のタイトルが、『朝鮮旅行記の一部(昭和二年十月) 慶州の部』であることから、そのことは明らかである。

11) 柳宗悦(1981)『朝鮮の友に贈る書』、『柳宗悦全集』第6巻、筑摩書房、p.42。初出は『改造』1920年6月号。

12) 柳宗悦・柳兼子(1981)『音楽会』趣意書』、『柳宗悦全集』第6巻 筑摩書房、p.172。1920年4月発表。

と行動に見られる彼の朝鮮に対する評価自体が問題含みであり、また彼と朝鮮総督府との距離や朝鮮の民族運動との関係など、近代日本の朝鮮認識を考えるうえで、容易に判断しにくい重要な問題であり続けてきた。¹³⁾

「親しく接する」ことを目的として、ある意味無邪気に朝鮮を旅した彼女達を、「帝国主義」という言葉のもとに批判することは容易いと思われる。しかし、そうした評価を急ぐことには慎重にならざるを得ない。なぜなら、彼女達の旅行の、何を問題とすべきかが見えなくなってしまう危険性があるためである。

よって、本稿では、同志社女専の1925年・1927年朝鮮旅行の足跡を辿ることで、この議論を開いていきたい。なお、同校は、1928年と1930年には朝鮮および満洲を周遊する旅行団を組織しており、先の二回の朝鮮旅行とあわせて、その計画意図や具体的様相、四回の間の変遷などにおいて興味深い点が多々ある。しかし、本稿では、柳宗悦と柳兼子が引率を行った前二回の旅行のみに焦点を当てることとし、以下、旅行記を主な手がかりとして、その足どりを紐解いていくこととする。

I. 同志社女子専門学校と朝鮮旅行

1.1. 同志社女子専門学校における長期旅行

女学校の長期(修学・卒業)旅行は明治末から大正期に盛んになるとされており¹⁴⁾、同志社女専でも、遅くとも1922年頃から1936年までは行われていたようであるが、実施年や規模から判断するに、結果的に同校の長期旅行のスタンダードは、多くの場合北海道を目的地とする東日本周遊旅行であったと言えるだろう。というのも、注¹⁵⁾で整理した通り、朝鮮・満洲旅行が行われた1925年

13) 柳宗悦に関しては、日韓両国で多くの先行研究があるが、1960年代後半に韓国でなされた批判的検討をはじめ、現在まで様々な視点から言及され続けていると言える。柳宗悦論としては、高崎宗司・1990や中見真理・2003など、また柳と朝鮮総督府、東亜日報など朝鮮の「民族系メディア」との関係については、梁智英・2007などを参照されたい。

14) 西村絢子(1985)参照。

15) 1925年から1930年の英文科・家政科三年生の長期旅行は以下の通りである。(『期報』掲載「学報」よ

から1930年の間も東日本周遊旅行は毎年並行して行われていたばかりか、朝鮮・満洲旅行が行われなかった1926年・1929年も含め、1936年まで毎年行われていることからそれは明らかである。このことから、1925年・1927年の朝鮮旅行、1928年・1930年の朝鮮・満洲旅行が、当初の計画はどうあれ、結果的にイレギュラーなものであったということが指摘できる。なお、前史をさかのぼると、1924年は12月8日に皇后行啓が行われたため、また1923年は関東大震災という「時節柄、例年の長き時日と多くの費用を要する卒業旅行を遠慮し」¹⁶⁾て、琵琶湖一周の遠足に振り替えられている。そして、1922年は英文科・家政科あわせて29名が、9月30日から1週間の日程で「関東地方に見修」¹⁷⁾の卒業旅行を行っている。恐らく、前出の「例年の長き時日と多くの費用を要する卒業旅行」とは、この関東旅行を指していると考えられるが、「長く時日と多くの費用を要する」とは言え、1922年頃までは関東まで北上するに過ぎなかったものが、1925年からは北海道まで足をのぼすとともに、朝鮮もが旅行先として選ばれていること、さらにそれに伴い旅程も二週間近くにわたるものとなったことは、学校にとっても、また生徒たちにとっても少なからぬ転機であったことだろう。

そして、それまでの日本列島北上コースとともに朝鮮が行き先として選ばれた背景には、何らかの働きかけがあったと推測してもあながち間違いではないだろう。この点において注目されるのが、1925年および1927年の朝鮮旅行を引率した柳宗悦・柳兼子夫妻の存在である。1925年の朝鮮旅行の立ち上げに際し、二人がいかに関与を与えたかを直接示す史料を入手できていないが、宗悦は旅行後の11月2日付で、バーナード・リーチに宛てて、「この4月より、同志社大学(男女共学)の教授の職につきました。〔略-引用者。以下同〕二週間前、家内と僕

り)

- ・1925年度：英文科・家政科あわせて53名「東京・仙台・松島方面」、15名「朝鮮釜山京城方面」。
- ・1926年度：英文科・家政科あわせて25名「九州方面」、59名「東京仙台方面」。
- ・1927年度：家政科39名は北海道、英文科66名は朝鮮。
- ・1928年度：家政科「北海道方面」、英文科28名「朝鮮満洲方面」。北海道旅行組の人数は不明。
- ・1929年度：家政科27名・英文科27名で「北海道方面」。
- ・1930年度：「北海道方面」。「鮮満旅行」として旅行記は掲載されているものの、「学報」には載なし。北海道、朝鮮・満洲ともに、参加学科・人数は不明。

16) 『学報』『同志社女学校期報』第49号 1923年、p.75。

17) 『学報』『同志社女学校期報』第48号 1922年、p.77。

は、同志社の女学生十四人を課外旅行として朝鮮に連れていきました。合唱団をつくり、朝鮮各地を旅してまわったのです。一つの実験ですが、大成功を収めました。金剛山にも行きました。その美しさは言葉では言い表せません。秋の朝鮮はまことに素晴らしい。」¹⁸⁾と書き送っている。ここで言う「一つの実験」には二通りの読みが考えられるが、一つは同志社女専初の朝鮮旅行、そしてもう一つは、合唱団を組織して「朝鮮各地を旅してまわ」る文化事業である。後者に関しては後ほど詳しく取り上げるが、ともあれ1925年旅行は、「家内と僕」が「女学生十四人を〔略〕連れてい」く形であったのであろう。1927年旅行については、宗悦が事務手続きに度々関わったことを示す史料もあり¹⁹⁾、旅行の実現に彼らの存在が影響を与えたと考えることは、妥当な推測であると思われる。

一方、朝鮮・満洲旅行が1931年以降行われなかった理由についても、現時点では想像の域を出ないが、ひとまず、1931年9月の、いわゆる柳条湖事件に端を発する満洲地域の政情変化を一つの要因として挙げることはできないのではないだろうか。先述のように、少なくとも1936年までは毎年東日本周遊旅行が実施される一方で、朝鮮・満洲旅行については1931年以降再開されることがなかったことから、「修学旅行」などと銘打たれていたとは言え、やはり、いわゆる「内地」旅行以上に深刻な危険を伴いうる状況をおかしてまで行すべきではないという判断が下されたと考えたとしても、無理はないだろう。

長期旅行への参加は、その人数からして、恐らく希望者のみという形であったと考えられる。とくに朝鮮・満洲旅行参加者について把握できる範囲で整理しておく、1925年は英文科・家政科あわせて14名、1927年は英文科の66名が参加している。1927年度の英文科三年生は、卒業時に127名の在籍があったようなので、およそ半数程度が参加したことになる。そして、1928年は英文科の28名、1930年は、在籍学科は不明ながら17名の参加者があったことが判明している。27年度の参加者数の多さが際立っているが、恐らくこの年は25年度以上に

18) 1925年11月2日付。原文は英文であるが、『柳宗悦全集』筑摩書房・第21巻下・1989年、p.296掲載の和訳を参考にした。なお、原文は同全集同巻のp.610参照。

19) 『昭和2年 同志社女学校庶務課日誌』の9月28日記事、「朝鮮行ニ付大丸店迄柳宗悦先生中川庶×(一字判読出来ず)英三長尾生(ママ)同行 汽車其他ノ件」ほか。(同志社女子大学史料室所蔵)

演奏旅行という側面が強かったためではないかと推測される。なお、松橋桂子によると、27年度旅行の費用は一人当たり60円(現在に換算すると20万円前後)であり、帰国後に一人10円ずつ返金がなされたというが²⁰⁾、少し時期は下がるが、1932(昭和7)年の同志社女専の授業料が85円であったことを考えると、決して手軽な旅行ではなかったことが分かる。²¹⁾

なお、現時点では、旅行記執筆者以外の参加者名が判明していないため、卒業名簿-本籍地や就職希望地などでしばしば植民地や占領地の地名が見られる-などのつきあわせが不可能である。よって、参加学生たちにとって、朝鮮・満洲に実際に降り立ち、現地の人々や文物・状況を見聞きすることがどういった意味を持ったかということは、判断しようがない。この点は、次節で取り上げる旅行の意図や意味づけの影響力に関する問題とも関わるので、今後の課題としたい。

一方、同時期の他旅行団のなかでの位置づけであるが、行程や見学場所などは同時期の他旅行団のルートと大枠では重なっている。それは、そもそも観光旅行というものの自体が、各地の鉄道や宿泊施設・観光資源などのインフラ整備を前提とするものであり、また同時期の多くの旅行者と同じルートを辿るからこそ、その移動が可能であったということを示している。とは言え、同志社女専に特徴的な要素も多々見られ、後ほど詳しく取り上げることとする。

また学生に限って言うと、1930年に朝鮮・満洲旅行を行った学生団体について長志珠絵が整理を行っているが²²⁾、やはり圧倒的に男子学生の団体が多いことは言うまでもないながら、関西・中四国・九州など西日本の女学校にとっては選択しうる旅先であったこともあわせて指摘しておきたい。

20) 松橋桂子(1999)『楷書の絶唱-柳兼子伝』水曜社、p.135。

21) とはいえ、1930年旅行記には「皆が写真機を取出し」(前掲、世古口・小野田・三水『満鮮旅行記』『期報』55号・p.138)で各自見学場所の写真を撮ったという記述もあり、彼女達の恵まれた経済状況の一端が垣間見える。なお、1932年12月15日付の『全国女子専門学校授業料学友会費調』(同志社大学社史資料センター蔵)によると全国の授業料平均は84円95銭である。同志社女専は85円であり、平均的な額と言えるが、この他に学友会費等の諸経費もあわせて総額は96円50銭となる。私学中ではとりたてて高額ではないが、府立校と比べると割高である。

22) 前掲、長(2007)、p.340。宮崎県立都城商工業学校の『白い着物と黒い衣裳』(1930年発行。同志社大学図書館所蔵)を参考にしたものである。

最後に、女子学生による朝鮮・満洲旅行の嚆矢は、管見の限り、1916年7月11日から21日まで行われた東京女子高等師範学校による「鮮満 [ママ] 視察」²³⁾であったようである。「女学生の鮮満視察は今回が嚆矢なり」²⁴⁾としてその予定を報じた『婦女新聞』では、旅行後の846号社説にて、「女子が男子に比して見聞狭く、又精神に於て偏狭の誹りを免れざるは、一つは旅行せざるが原因ならん」²⁵⁾とし、遠方旅行、とくに学生時代の「確なる監督の下」での旅行がすすめられているが、この東京女高師の旅行では、学生の参加者が4年生9名、2年生1名の計10名に対して、引率者は教授2名(男女各1)、教諭2名(男2)、訓導2名、助教諭1名の計7名であり、その比率が興味深い。なぜ、「確なる監督」が必要であるのか。本社説では、「女子を保護者なしに旅行せしむる危険」が旅先での「誘惑欺瞞」にあると述べる。そして、それに対抗するのが女子学生自身の「自主的精神」であり、女性の一生に影響を及ぼすそれを養うためにも、「各女学校が、毎夏期休暇に旅行団を組織するを恒例とし、志望者のみ団員として、周到なる注意の下に、修学旅行を行」²⁶⁾うべしとする。

一行は、「先づ釜山に上陸し京城仁川平壤を視察し、次で満洲に赴き奉天撫順大連旅順を経て [略] 帰京」²⁷⁾しており、行程の大枠は、10数年後に朝鮮・満洲旅行を行った同志社女専のそれと大枠は重なっている。詳しい訪問地は不明ながら、教育機関視察が主な目的であったことが推測されるが、同旅行記には、「家事科の改良」という語とともに「朝鮮婦人」に注意が払われるとともに、労働という側面から朝鮮と「支那」の男女の比較がなされるなどしており、最終的には、「内地婦人の移住をのぞむ」という結論が導き出されている。それは、「発展すべき余地の充分ある新植民地」の「発展が遅れ」ていることを前提とし、その理由を「日本婦人」が移住しないため、もしくは移住したとしても住み着かないた

23) 当時の使用意図から考えて、「鮮満」という語には「ママ」という注記を付ける必要があるが、煩雑さを避けるため本稿では以下省略することとする。「満鮮」という語についても同様とする。

24) 女高師生の鮮満視察-及び富士山登山-、『婦女新聞』843号・1916年7月14日。

25) 「社説 婦人と旅行-女学校に夏期修学旅行段の組織を望む-」、『婦女新聞』846号・1916年8月4日付。

26) 前掲「社説 婦人と旅行」、『婦女新聞』846号・1916年8月4日付。

27) 「女高師生の鮮満視察」、『婦女新聞』843号・1916年7月14日付。なお、8月11日付の847号には、引率した女高師教授森岩太郎による旅行記が掲載されている。

めであるとし、「現に今度の如く、遠く海外に旅行して見て、始めてかの地の実況もわかり、恐るゝに足らぬとの信念を得ることも出来たのでありますから、一般の婦人も、須く旅行に慣れ、海外の移住をもつと容易に思ふ様にならなければ一等国の婦人として世界の舞台に立つ資格がム(ござ)いません」²⁸⁾ [文中ルビママ]と論ずるのである。実際にどのような効果を生んだかはともかく、朝鮮・満洲旅行は、「自主的精神」を養うためにも女性に長期旅行の経験とそれへの慣れを促し、かつ、海外-つまり「新植民地」への移住に対する抵抗感や不安感を拭うこと、それにより「一等国の婦人」の自覚を持つよう「内地婦人」を鼓舞することが目指されていたと言えるだろう。つまりここでは、朝鮮や満洲を旅することで、「かの地の実況」がわかるとされているが、それは「海外の移住」のために必要であるとされている。そして、「一般の婦人」に先がけた一つのモデルケースとして、東京女高師の学生たちは「鮮満」を旅したのである。

前章で、「観光への期待はあらかじめ作られており」という文を引用したが、本来、朝鮮や満洲を巡る旅とは、無理解から理解への旅として設定されたものであったと言えるだろう。観光への期待とは、肯定的側面だけでなく否定的側面のものも含まれており、「かの地」と「内地」との違いを期待し、それが何たるかを知り、その上で、「恐るゝに足らぬ」とその違いを消化していく足取りであったと考えられる。

以上のような意味づけを下敷きとしながら、その後、朝鮮や満洲への旅は女性を含む日本人に提示されていったと考えられるが、同志社女専の旅行はどのような状況にあっただろうか。次節では、1925年から1930年にわたる四回の旅行における変遷にも触れながら、その意味づけを整理することとしたい。

1.2. 旅行の意味付けについて

1925年の朝鮮旅行が、柳宗悦と柳兼子の影響で開始されたと考えられる点はすでに述べたが、旅行の目的を推測するためにも、先に挙げた宗悦の書簡が参考になるだろう。つまり、「合唱団をつくり、朝鮮各地を旅してまわ」ること、そし

28) 前掲、森「聞いた鮮満と見た鮮満」『婦女新聞』847号・1916年8月11日付。

て、金剛山にて美しい「秋の朝鮮」を愛でることである。宗悦自身がこの旅行の意味づけに触れた史料は管見の限りこれ以外に見られないが、宗悦が直接関わった前二回の旅行の目的がより端的に示されているのが、冒頭にも引用した1927年『朝鮮旅行記』の、「私達の今度の朝鮮旅行は一方朝鮮の人々と自然に親しく接すると共に、朝鮮の古代美術を鑑賞しやうと云ふのが大きな目的であつた。」という一文である。先にも述べたように、この「親しく接する」の内実を探ることが本稿の主眼であるが、前提として確認しておきたいことは、文章の上だけのこととは言え、そこに「わかる」や「理解」という言葉が含まれていないことである。さらに旅行記の記述からは、わからなければならない、理解しなければならないという姿勢も希薄であったことが伺え、恐らくこのようなあり方は、柳宗悦と柳兼子の思想が影響を与えたものと考えられる。

もちろん、宗悦によって、美術を通じた独特の朝鮮「理解」が促されていたであろうことは想像に難くなく、そういった「理解」のもつ意味を問う必要があるが、ひとまずここでは、少なくとも前二回の旅行については、先の東京女高師教授が記したような「内地婦人の移住」を目指して「かの地の実況」を「わかる」ために旅行するというあり方とは異なる論理が目指されていたということを指摘するに留めたい。さらにそれは、『期報』51号掲載の1925年旅行記の末尾に、「今日でいよ／＼京城にもお別れかと思ふと淋しい気がした。色々と私共の胸の印象を残してくれたこの町とも再び逢へるかどうか？」²⁹⁾という記述があることから伺えることであるが、「この町」との距離感は、1928年旅行記が、「鮮満の地」を「私達の生活すべき天地」、「自分達の世界」³⁰⁾として筆をおいたこととは大きく異なっているとと言えるだろう。

しかしそうであったとしても、柳宗悦・兼子のねらいがどうあれ、女子学生たちの経験がどうあれ、それはきわめて微妙なバランスの上に成り立ったものであったことは言うまでもない。例えば、1927年10月7日付『大阪朝日新聞附録朝鮮朝日』には、宗悦の談として以下のような記事が掲載されている。

29) 青木輝子(1926)『専門学部卒業旅行／朝鮮への旅の思ひ出』『期報』51号、p.132。

30) 園田好子・石川寿子(1928・11)『英文科三年鮮満旅行記』『期報』53号。

宗悦氏は／今年來鮮の一行はみな明年の卒業生で家庭に入る彼女等に朝鮮の総てを見聞させることは内鮮融和の上にもきはめて適切な試みと思ひますのでこれからは毎年連れだつて来る予定ですと朝鮮に対する理解ある純情は何時も変らぬ³¹⁾

『大阪朝日新聞附録』であるという性格上慎重に読む必要があるため、³²⁾宗悦が実際にこのようなことを口にしたかどうかはともかくとして、いずれにせよ彼女たちの朝鮮旅行は、宗悦の『朝鮮に対する理解ある純情』とともに、『内鮮融和』のための一つの手段として、言わば『外』から意味づけられうるものであったのである。『親しく接する』ということに、ひとまず『わかる』や『理解』が接続されていなかったとは言え、それは柳の論理からも、また『外』からの論理によっても、簡単に接続されうるものであったと言えるだろう。

一方、『移住』に関わって旅行を意味づけるというあり方は、同窓会や学友会による歓迎会の場などでは行われていたようである。例えば、『朝鮮旅行記』には、1927年10月8日に、京城在住の元同志社専門学校校長・丹羽清次郎なども参席して行われた『同志社校友の歓迎会』で、『現在京城にをる同志社卒業生は男女合せて四十名、年々増加して行く傾向がある』³³⁾という話があったという記述が見られる。丹羽は、翌1928年の朝鮮・満洲旅行参加者を迎えた歓迎会にも出席し、

諸嬢が朝鮮を視察し、更に満洲に入られんとすることを知り、大いに愉快に存じた次第であります。朝鮮を知ることは誠に必要であります。そして今や内地より多くの男女学生が朝鮮を視察せらるるに至れるが実に喜ばしいことでありますが、更に百尺竿頭一步を進めて満洲に入り、同地にて同胞が如何に活動して居るかを見ることは、実に心踊り血湧くことであります。³⁴⁾

31) 『学窓を出る乙女達に／朝鮮の事情を／見聞きさせ度いと／柳宗悦氏同志社生を同伴』『大阪朝日新聞附録朝鮮朝日』1927年10月7日付。

32) 1920年2月に柳夫妻が朝鮮を訪問した際、同月3日の京城日報に『私達の渡鮮は芸術を通じて朝鮮を教化〔原文傍点あり〕する為だと』(『朝鮮を想ふ』1920年4月10日付。『柳宗悦全集』第6巻、p.50)宗悦が述べたように書かれ、それに対し、28日に同紙に『教化に行くのではない』という旨の宗悦の反論が掲載されたようである。(『年譜』『柳宗悦全集』第6巻、p.241)

33) I・A『京城の部』『朝鮮旅行記』、p.22。

34) 丹羽清次郎『旧師御通信』欄への寄稿、『女学校期報』53号、p.243。

と語ったというが、ここでは「朝鮮を知る」ことの必要性が語られるとともに、彼女たちの旅行が、「視察」という語で意味づけられている点にまず注目したい。さらに、満洲で活動する「同胞」の存在が示され、その活動を見ることが「心踊り血湧くこと」として強調されているが、それは、1927年旅行が目的とした現地の人々と「親しく接する」という方向性ではなく、「同胞」を通して満洲を見るというあり方へと転換されている点が指摘できるだろう。

さらに、1930年旅行の日程中に開かれた、京城駅階上食堂での同窓生による歓迎会で、

「一度朝鮮の土地を踏んだ者は第一に唯の見学に留まらず我等と同じく同胞なる朝鮮人なるものをよく理解して、此前途洋々若く新興の意気に燃ゆるところの人達と親しくし且内地に紹介して国家の為いな全東洋永遠の平和の為に内鮮融合の実を挙げ〔略〕、勇敢にこの地に進出することが必要なる我等の責任である」といふ意味の五六人の感話の後に会はとじられる。³⁵⁾

という様子であったようである。この文章は、『期報』55号(1930年12月刊)に掲載されたものであり、1930年に行われた「満鮮旅行」³⁶⁾での体験を、オフィシャルな媒体向けに整えて書き記したものであると考えられるが、いずれにせよ、「内鮮融和」のために、「我等と同じく同胞なる朝鮮人なるものをよく理解」することの必要性と、その意味における旅行者の責任が説かれていることは重視すべきであろう。さらに、このような文脈で話された歓迎会での言葉に、「親しく」という語が含まれていることは注目に値する。このような論理は、1928・1930年旅行の行き先として満洲が加わったためというよりはむしろ、そこに柳夫妻が直接的に関わらなくなったことで、「親しく」という語に込められた政治的意味や、朝鮮(および満洲)旅行に期待された本来の目的が、前景化したと見る事ができるだろう。

先に、『期報』掲載の1927年旅行記における、朝鮮の「人々」と「親しく接する」

35) 世古口敏子・小野田ひさ・三水智恵子「鮮満旅行記」『期報』55号・1930年12月刊、p.135。

36) 前掲、世古口・小野田・三水による旅行記タイトルより。

という語の脱落について指摘したが、1930年旅行記に見られる論理に従えば、1927年『期報』掲載旅行記においても「親しく」という語が含まれてもおかしくはなかったであろう。しかしここでは、慶州の歴史、美術や遺跡に関わる専門的叙述が大部分を占め³⁷⁾、「自然を見」、「美術を鑑賞」という方向性がとられている。それは、『朝鮮旅行記』に寄せられた文章における「親しく接」したあり方やその原因となった彼女達の経験が、オフィシャルな場で語られる「内鮮融和」のための「親しみ」や「理解」という文脈にそぐわなかったからではないだろうか。では実際、彼女達が朝鮮旅行を通してどのような経験をしたかということであるが、それは「朝鮮の人々と自然に親しく接する」ということが、具体的にどのようにして試みられていたのかを明らかにする作業でもある。その具体的様相や、それを事後にいかにか表現したのかを、1925年旅行については『期報』掲載旅行記を、1927年旅行については、冊子『朝鮮旅行記』を手がかりに探ることとしたい。なお、現時点では、一部旅程が判明していない部分があることを予め断っておきたい。

Ⅱ. 女子学生たちの朝鮮旅行

2.1. 旅程と主な行き先

まず、それぞれの旅程から確認することとする。

1925年旅行は、10月12日に京都を出発し、下関から釜山へ上陸、そして慶州、大邱、京城、鉄原、金剛山をめぐり、再び京城、釜山、釜山から下関、途中山口に寄り、同月23日に京都へ到着している。なお、大邱は京城へ向かう満鉄奉天行列車に乗り換えるための下車のみであり、鉄原も同じく金剛山へ向かうために経由しただけである。

一方、1927年旅行は、10月5日に京都を出発し、下関から釜山、慶州、京城までは1925年旅行とほぼ同じであるが、その後平壤へ寄り、12日には金剛山を

37) 旅行記末尾には「旧蹟遺物の説明は慶州古蹟案内其他による」(『期報』52号、p.168)という記述があり、案内書を参照しつつ整理したことが伺える。

訪れている。しかしそれ以降の旅程が不明であり、17日に京都へ到着するまでの足取りが掴めていない。³⁸⁾行程上における1925年旅行との違いとしては、音楽会³⁹⁾の予定があったためかもしれないが、平壤を訪れていることである。朝鮮の遺跡とともに、文禄の役及び日清戦争という「古戦場の名借を止めてある昔の門や要塞」⁴⁰⁾を訪れている。

行き先を簡単にまとめると、釜山では龍頭山、慶州では佛国寺、吐含山と石窟庵、慶州博物館、京城では南大門、景福宮、朝鮮総督府、柳が設立した朝鮮民族博物館、朝鮮神宮、昌徳宮秘苑と李王家博物館、「京城の最も繁華な朝鮮人街である鐘路」⁴¹⁾、明月館、三越、同志社女学校に在籍礼暦のある淵澤能絵が理事をつとめる淑明女学校、平壤では「古戦場」、そして金剛山である。1925年の金剛山登山は「内地からの女学生団体が来たのは是が嚆矢」⁴²⁾とされ、登山後の写真が、音楽会の告知とあわせて京城日報で報じられている。先に引用したリーチへの手紙で宗悦が金剛山を絶賛していたように、学生達にとってもインパクトが大きかったようである。そのように考えれば、金剛山登山は、「朝鮮の人々と自然に親しく接する」のうち「自然」の一つに当てはまると言えるだろう。

そして、これとはまた少し異なる論点であるが、ここで取り上げておきたいことがある。それは、1925年旅行記が「この町とも再び逢えへるかどうか？」という感想を記していることを先に挙げたが、1927年旅行記で興味深いことは、「此処がフランス、スペインまでも続いてるんだと思っただけでも島国の乙女の血は！！」⁴³⁾や、「このまゝ鴨緑江を越えて支那に入り、満洲を越えて露国に足を踏み込めば、先きはおのづから歐洲へ行けるだろう。〔略〕あっちへ行きたい。」⁴⁴⁾

38) 『朝鮮旅行記』でも、金剛山以降のことについて触れた文章がないため、音楽会を含む重要行事が含まれていなかったのではないかと推測している。

39) 1925・1927年旅行中に行われた演奏会は、新聞上では「柳兼子独唱会」と記され、女専生徒の合唱は番外とされているが、煩雑さを避けるため、本稿では「音楽会」で統一する。

40) S・E「平壤」『朝鮮旅行記』p.33。

41) I・A「京城の部」『朝鮮旅行記』1927、p.22。

42) 「金剛山探勝した／女大生帰る／宗悦氏夫妻に同志社女子部の一行／今夜は公会堂で演奏」『京城日報』1925年10月21日付。記事には、登山後の一行の写真とともに、「金剛山では内地から女大生の団体が来たのは是か嚆矢ださうで、金剛山の坊さん達から珍しがられたさうである。」と報じられ、当日夜の音楽会の開催がプログラムとともに紹介されている。

43) Y・N(1927)「仏国寺まで」『朝鮮旅行記』、p.3。

という記述があることである。

それは西欧への憧れを単純に表しているものと読むこともできようし、さらには、「支那」と満洲を簡単に越えていけるという発想や島国の窮屈さを吐露する文章からは、帝国の「膨張意識」とも解釈することができるかもしれない。しかしこの感覚は、朝鮮・満洲を旅した1928年の旅行記が「私達がどれだけ今度の旅行の為に満洲を理解しそして親しみを感じたことか。〔略〕私達は、今度初めてここにも私達の生活すべき地を見つけて、本当に自分達の世界が広がったことを喜びとする」⁴⁵⁾と記していることと比べれば、確かに違いがあるだろう。それは、ヨーロッパへ続く大陸の入り口として朝鮮を意識することと、日本の延長として朝鮮を認識することの差であるとも言える。

以上、旅行の概要について整理したが、次節以降では、「朝鮮の人々と」「親しく接する」ことについて、とくに音楽会と、人々との出会いに注目してみることとする。

2.2. 音楽会の開催と「植民地近代」

—柳宗悦・柳兼子の思想と実践に触れて

次に、各地の観光とともに、女子学生たちにとってこの旅行の重要な要素であったであろう音楽会について見ることにするが、その前提として、柳宗悦と柳兼子について簡単に整理しておきたい。

民芸運動の創始者として知られる柳宗悦は、その生涯を通じて民芸運動の枠にとどまらない多様な活動を行っているが、なかでも朝鮮との関わりにおいては、1945年以前の日本の知識人のなかではある意味独特な位置を占めていたと言える。3・1独立運動後には日本の植民地統治に対する批判的意見を表明し、朝鮮美術への「理解」を通じて朝鮮の独自性を評価するなどしており、それはある面では朝鮮総督府の「文化統治」との親和性を持ちながらも、光化門取り壊し反対運動や朝鮮民族美術館設立運動などにより、解放後もしばらくは(そして現在

44) I・F「帰途」『朝鮮旅行記』1927年10月、p.40。

45) 園田好子、石川寿子「英文科三年鮮満旅行記」『同志社女学校期報』53号 1928、p.112。

もある面では肯定的に評価されてきた人物である。

そして先にも述べたように、1925年に朝鮮旅行が開始されたことに、柳夫妻が影響を与えていたことが推測されるが、しかし朝鮮をめぐる彼らの思想が具体的にこの旅行にいかに関わっていたかについては、ほとんど伺い知ることができない。もちろん参加者に対して何らかのレクチャーがあったであろうことは、旅行記に「曲線美」⁴⁶⁾や「朝鮮独特の線の美」⁴⁷⁾などという表現が見られることから推測される。また旅行中にも、釜山・国際館での「朝鮮への見方」や、朝鮮民族博物館での「工芸の美」と題する講演会が行われているばかりでなく、兩年ともに、宗悦の設立した朝鮮民族美術館を訪れていることから、様々な美術・史跡を宗悦自ら説明を行うという場面も十分に考えられるだろう。

また、同志社女学校との関係についてであるが、柳宗悦は、1924年5月から同志社女専英文科講師、翌年には同志社大学文学部英文学科講師・女専英文科教授に就任、29年4月には両方を辞している。一方、声楽家であった柳兼子は、1925年4月から女専講師をつとめ、音楽科を担当していた。兼子は、1927年10月の女専朝鮮旅行時には離職していたと考えられるが⁴⁸⁾、旅行記からは兼子も京都出発時から参加していたことが分かる。ちなみに、1927年度旅行の参加者である3年生は、入学時から柳夫妻の指導を受けており、宗悦を「パパ」、兼子を「ママ」と呼んでいたようである。

さて、本稿との関わりで言うと、柳の姿勢や、彼の企画による柳兼子独唱会(音楽会)を通じた「文化事業」を、女子学生たちの朝鮮旅行においてどのように位置付け、評価するかという問題である。

同志社女専の朝鮮旅行より数年先立つが、まず確認しておきたいことは、柳宗悦と柳兼子が朝鮮で行った最初の事業が音楽会開催であった点である。連名で発表された「『音楽会』趣意書」(1920年4月付)では「隣国の人々に対する兼々の信頼と情愛とのしるしに今度渡鮮して音楽会を開きその会を朝鮮の人々に献げるつもり」⁴⁹⁾とされており、それは同年に発表された「朝鮮の友へ贈る書」でも表

46) F・T「朝鮮雑感」『朝鮮旅行記』1927年10月、p.52。

47) I・A「京城の部」『朝鮮旅行記』1927年10月、p.27。

48) 『同志社女学校期報』52号(1927年11月刊)掲載「学報」より。

49) 柳宗悦・柳兼子「『音楽会』趣意書」『柳宗悦全集』第6巻・1981年、p.172。

明されている。最初の音楽会は東亜日報社主催により行われ、以降、日本のみならず朝鮮でも音楽会を多く開催するようになる。それは前出のように「信頼と情愛とのしるし」であるとともに、それを形にした「朝鮮に対する親愛の事業の資金」⁵⁰⁾集めのための方法として、重要な役割も担っていたようである。

一方、アルトの声楽家として日本で草分け的存在であった柳兼子による音楽会は、「朝鮮近代の西洋音楽受容史において声楽家による本格的な演奏会の始祖」⁵¹⁾とされるものであるが、「朝鮮固有の美」⁵²⁾や「古芸術」⁵³⁾の価値を主張し、守ろうとした宗悦が、音楽においては主に西洋音楽を朝鮮の人々に積極的に提示した点については、どのように考えれば良いだろうか。もちろん、あくまで音楽会については、「情愛と敬念とのしるし」の贈り物として考え、散逸し壊される朝鮮美術や建築とは別のものとして考えていた可能性もあり、また美術の場合は、日本と中国との差異化を強調するために朝鮮の固有性を主張したという側面もあるため、彼にとって、音楽についてはあえてそうする必要がなかったと言えるかもしれない。しかし、例えば、1920年の朝鮮滞在時に受けた歓待に含まれていた音楽を、「今は稀な古風の音楽」⁵⁴⁾とただ珍しいものとして書き記している点については、美術との扱いの差に改めて注意を向ける必要があるだろう。

宗悦の音楽に対する捉え方はともかくとしても、彼が朝鮮の人々のために、「朝鮮に対して抱いてある敬愛の念を、何事かによつて披露したい考へ」で、「音楽会を開いて、その収入の全部を朝鮮文化の仕事に献げようと」⁵⁵⁾したことは、改めて確認しておくべきだろう。こういった方向性で音楽会は開かれ、そして何よりもそれが彼と彼女らの旅行を特徴付け、主催として関わった東亜日報や京城日報などに報じられ、記事になるなどして話題ともなったのである。

音楽会は、1925年は釜山で1回、京城で2回、山口で1回、1927年は少なくとも、京城で4回、平壤で1回(一部旅程が不明なため、暫定数)開催されている

50) 『年譜』(1982)『柳宗悦全集』第22巻下・筑摩書房、p.241。

51) 金希貞(2003)、p.7。

52) 柳宗悦『朝鮮の友に贈る書』『柳宗悦全集』第6巻、p.46。

53) 柳宗悦『朝鮮の友に贈る書』『柳宗悦全集』第6巻、p.48。

54) 柳宗悦『彼の朝鮮行』『柳宗悦全集』第6巻、p.58。

55) 柳宗悦『彼の朝鮮行』『柳宗悦全集』第6巻、p.55。

が、ここではとくに京城で開催された音楽会を取り上げることとする。

最初に指摘しておきたいことは、1925年も1927年も、東亜日報社と朝鮮日報社それぞれが音楽会を主催・後援していることである。1925年は、まず10月16日に東亜日報と朝鮮キリスト教青年会の主催により、長谷川町公会堂にて開催されており、全収益が朝鮮水害救済事業に寄付されたという。そして、10月21日には京城組合教会主催・京城日報後援の音楽会が、同じく長谷川町公会堂で行われている。長谷川町とは、現在でいう소공로(小公路)であり、植民地期には、三越や郵便局、朝鮮銀行と京城府庁を結ぶ要路であり、朝鮮ホテルなども立地していた。同公会堂は、1927年時にも、10月10日の朝鮮組合教会主催、京城日報後援の音楽会場となっている。同日昼には淑明女学校で音楽会を開き、それに先立つ10月8日には龍山公立第二高等女学校で、同日夕方には中央基督青年会館(東亜日報主催)にて音楽会が行われている。

龍山公立第二高等女学校や淑明女学校で行われた音楽会に、一般客がどれほどいたかは不明であるが、少なくとも新聞社主催で行われた音楽会は、紙面で広告が打たれたのはもちろん、同志社女専一行の旅の動向を報じながら音楽会を宣伝するという方法で、新聞購読層に門戸を開いていたようである。なお、ここでは深くは触れないが、東亜日報と京城日報の関わった音楽会の主催・後援者と開催場所の組み合わせについては、植民地下におけるそれぞれの立場を表しており興味深い。旅行記にも、東亜日報主催の音楽会については、「朝鮮キリスト教青年会の主催だけに聴衆も鮮人〔ママ〕が多かった」(1925年⁵⁶)、「聴衆も殆ど全部鮮人〔ママ〕で会場は満員」(1927年⁵⁷)とわざわざ書かれており、東亜日報主催と京城日報後援の音楽会では客層に差があったのだということが推測できる。なお、客席に座っていた人々の人物像は、1925年旅行記の釜山での音楽会について「聴衆は一ぱいで大半は女学生」⁵⁸という記述がある以外判明しておらず、新聞を含むメディアにアクセス可能だった一定以上の知識階層が主だったのではという推測しか現時点では持ちえていない。

56) 青木輝子(1926)『専門学部卒業旅行／朝鮮への旅の思ひ出』『期報』51号、p.128。

57) I・A・(1927)『京城の部』『朝鮮旅行記』p.22。

58) 青木輝子(1926)『専門学部卒業旅行／朝鮮への旅の思ひ出』『期報』51号、p.125。

さて、音楽会の内容について、先に「西洋音楽」と表現したが、注⁵⁹⁾で整理したように、現時点で判明している限りでは、1925年は全てクラシック曲、1927年はクラシックをメインとしながら、和歌を題材とした歌曲や童謡など日本語曲も演奏されたようである。これらを、プロの声楽家である兼子と、ミリアム・クワイア(聖歌隊)として学校内外でステージを踏む同志社女専の合唱団——1927年は60名にもなるので、迫力があつたであろう——が演奏するという、大きなインパクトを持つイベントであつたと推測される。

つまり京城の音楽会は、新聞社やキリスト教団体による主催・後援、そして

59) 音楽会のプログラムを、二種類紹介しておく(但し、一部体裁を変え、詳細は割愛している)。

①は、1925年10月21日に行われた京城組合教会主催・京城日報社後援で行われた柳兼子と女専生徒14名による音楽会、②は1927年10月8日に行われた東亜日報社主催の柳兼子と女専66名による音楽会である。(出典は、『京城日報』1925年10月21日付、『東亜日報』1927年10月8日付。なお、1927年音楽会については、音楽会前日の新聞に掲載されたものである。)

- ①第一部 一 合唱(全員) アルカデルト作『アヴェマリア』、賛美歌310
 二 二部合唱(喜多村・三浦) モツァルト作『フィガロ』より
 三 ピアノ独奏(北村) シューベルト作『アンプロンプチュ(作品90)』
 四 独唱(喜多村) メンデルスゾーン作『パウルス』
 五 ピアノ独奏(中村) ショパン作『ノクターン変ロ長調(作品32)』
 グリイヒ作『ノールウセー結婚行進曲』
- 第二部 一 三部合唱(全員) レーヴェ作『別れ』
 二 ピアノ独奏(船坂) ゴタール作『エチコードコンサート』
 デビュッシィ作『亜麻色の髪の乙女』
 三 独唱(柳兼子) ゴタール作『子守唄』
 ゴルヂチャーニ作『聖母マリア』
 プルンネン作『つばめ』
 ベートーベン作『吾は汝を愛す』
 四 合唱(全員) シューマン作『プライヘリン、ナハトリイド』
 シューマン作『タンブリン、シュレーゲリン』
- ②第一部 一 独唱(柳兼子) ロッシーニ作歌劇『セミラミデ』より
 二 独唱(柳兼子) 信時潔作『百人一首「久方」』、アットゥ作『杜の森』ほか
 三 独唱(柳兼子) グノー作『アヴェマリア』
 四 独唱(柳兼子) トスティ作『小夜楽』
 五 合唱(女専生徒全員) 曲目は後述
- 第二部 六 ピアノ独奏(船坂すま子) 曲目不明
 七 独唱(柳兼子) ヘイス作『故郷の廃屋』、柳兼子作『春草、秋草』、草川信『風』、
 プルンネン『燕』
 八 独唱(柳兼子)ビゼー作『カルメン』より『ハバナネラ』、『デギディリア』
 九 合奏(女専生徒全員)シューマン作『流浪の民』、『はとぼっぼ』の三部輪唱、杉山長
 谷男の『金魚屋』など、5、6曲(前掲、松橋、p.138)

報道、町公会堂や中央基督青年会館・学校という近代建築物での開催、西洋音楽をメインとし、一部日本語曲も含んだプログラムという、まさに植民地における近代のあり方をよく表したものであったと言える。

先に私は、柳宗悦と柳兼子の「信頼と情愛のしるし」という言葉をひきながら、「贈り物」という言葉でこの事業を表現したが、西洋音楽を提示するということは、美術の場合にあった、「守る側／守られる側」という関係とはまた異なる権力関係を示すものであったと言える。それはつまり、「与える側／与えられる側」というあり方であるが、ましてやそこに日本語曲も加えられることの意味は、それがいかに芸術的に素晴らしい演奏だったとしても慎重に考えなければならないだろう。なお、兼子は、1927年10月8日の東亜日報主催の音楽会では、「白と水色の美しい朝鮮服」⁶⁰⁾を身にまとしてステージに立ったようである。⁶¹⁾彼女のその行動は、兼子なりの「朝鮮の人々に親しく接する」ための方法の一つであったかもしれない、そして事後の新聞報道を見る限り聴衆にも受け入れられたかもしれないが、両義的な意味を持つものであったと言えよう。

しかし、そうでありながらも、学生たちにとっては、ステージの上と下という関係性ではありつつも、「朝鮮人主催」の音楽会や「朝鮮人の白衣が大分見え」という状況のなかで、「親しく接する」の一端が試みられたと言え、音楽会が毎回盛況に終わったことで彼女達自身も安心感を得たようである。旅行記では、「讚美歌のコーラスに初まり 思つたよりも元気に歌ひ終へる事ができた」(括弧内ママ)⁶²⁾などと自分たちの状態を記し、また兼子の演奏に度々アンコールがかけられ大盛況だったことを喜び、「会は無事に終わった。〔略〕我々一同はほつと肩の荷をおろし」⁶³⁾と、ささやかな感想をもらしているに過ぎない。

音楽会は、植民地における近代、そこに日本人がどう関わっていたのかを表す一つの象徴的なイベントであったと言える。「信頼と情愛のしるし」であれ何で

60) I・A(1927)『京城の部』『朝鮮旅行記』、p.22。なお、東亜日報の1927年10月10日付記事(「再請三請의妙音曲／錦上添花의合唱並奏／本社主催柳兼子独唱盛況」)には、「朝鮮服」を着た兼子の全身写真も掲載されている。

61) 同年10月10日の朝鮮組合教会主催・京城日報後援の音楽会では、「純白の洋装」でステージに立ったようである。(I・A(1927)『京城の部』『朝鮮旅行記』p.28)

62) 青木輝子(1926.7)『専門学部卒業旅行／朝鮮への思ひ出』『期報』51号、p.127。

63) I・A(1927)『京城の部』『朝鮮旅行記』、p.28。

あれ、ステージの上下という関係が表しているように、日本と朝鮮における力関係を前提としたものであった。そういった意味で留保付きのものではあるが、しかし、それでもそういった形であれ、女子学生達にとって、朝鮮の人々に触れ、交流する稀有な場になっていたということは、この旅行の重要な特徴であり、重視すべき点であろう。

2.3. 人々と出会う、出会いを記す

最後に、「朝鮮の人々」と出会うということが、音楽会以外の場でどのようになされていたかを見ることとするが、その前提として「朝鮮の人々」も含め、彼女達が朝鮮旅行中にどのような人に出会ったかを整理しておきたい。

まず、先行研究でも指摘されているように、植民地観光では、現地在住日本人が「本来のホスト(ネイティブ)」⁶⁴⁾にかわり旅行客を迎えるという構図が多々見られるが、この二回の旅行の場合も、柳宗悦・兼子の人脈(親戚、友人、知人)と、同志社OB・OG、組合教会などのキリスト教の人脈、そして、案内役としての植民地官僚や新聞記者などである。例を挙げると、1925年旅行の場合は、釜山日報記者(「青山さん泉さん」)、浅川伯教・巧夫妻、長谷川町教会牧師、同志社校友・女学校同窓、淑明女学校理事の淵澤能絵、1927年の場合は、慶州博物館館長諸鹿央雄、同志社校友(丹羽清次郎含む)、浅川巧・浜口良光・「今度音楽会をするに就いて非常にお世話になつた方です。〔略〕最近京城日報が人気投票を行ったとき、第一番に当選した京城一の人気男」⁶⁵⁾だという渡辺某など柳の友人、そして淵澤能絵などである。

くわえて、両年ともに音楽会を開催したため、その主催者である東亜日報、京城日報、朝鮮キリスト教青年会などの関係者や、1927年には放送局を通して兼子と合唱団それぞれの演奏を放送しているので、その関係者なども挙げられるだろう。これらの人々のうち、どの程度が「朝鮮の人々」であったのかは定かではないが、通常の旅行者では出会わないであろう人々に音楽会を通して出会って

64) 高媛(2002)、p.218.

65) I・F(1927)「京城の部」『朝鮮旅行記』、p.24.

いることは、留意しておく必要があるだろう。

そして、以上のような予測可能な出会いのほかに、「朝鮮の人々」とのある意味イレギュラーな出会いもあったことが、旅行記には記されている。1925年と1927年の旅行記から、それぞれ一つずつ挙げておきたい。

まず、1925年の旅行中、大邱へと向う列車での出来事であったというが、

車内には可成り酔ふたらしい朝鮮の老人があつた。顔はやはり赤銅色であるが好々爺で気やすい心持を起させる。心よく席をゆずつてもらつた掛り合から朝鮮のうたを二つ三つうたつてくれた。次々と色んなのをうたつてみるうちはよかったが、車掌が乗車券をしらべに来た時どうしたのかお爺さんは切符を失つて青くなり初めた。探しても見あたらず、気毒になつたので私共が少しづつ集めてお金をあげると初めは中々受取らうともしなかつたが、とう／＼おさめてしまつた。どこかの駅でとまると老人はさつきのお金で林檎や梨を買込んで来てみんなにくれるのであつた。／＼柳先生が何かと慰めてやられると少し元気を恢復した。⁶⁶⁾

次に、1927年旅行での、佛国寺近辺での一幕であるが、

やさしい顔をした年とつた三人の婦人に遇つた〔略〕彼等は初めて顔を合わす私達に、かぎりない親しみと厚意を、顔に表はして何事かしきりに話しつゞけ、そして静かに私達をみやつてゐた。一人の婦人はいよいよ近づいて、私共の着物にさはり、一人／＼の袖に見入つたりしてゐた。彼らは純白の着物を着てゐた。私達も不意に現れたその人達に深いなつかしさを感じて、言葉の代はりに心をこめて幾度もおじぎをしたのに、婦人等は又何とやさしい挨拶をもつてそれに答へたであらうか。⁶⁷⁾

前者に関しては、老人とどのようにコミュニケーションをとったのか——朝鮮語か日本語か、はたまた言語を解さないものであつたのか——という点や、女子学生が老人にお金を渡すという場面自体についても判断が難しいところであるが、少なくともそれが思いがけない出会いのエピソードとして書かれており、切

66) 青木輝子(1926年7月)『専門学部卒業旅行／朝鮮への思ひ出』『期報』51号、p.127。

67) S・S『仏国寺の夕』『朝鮮旅行記』、p.53。

符をなくしてしまったという老人への視線やこれを書き記すということ自体、「親しく接する」ことの実践として読めるのではないだろうか。

また後者に関しては、「年とった三人の婦人」の胸中が本当に「かぎりない親しみと厚意」に満ちたものであったかどうかは判断のしようもないが、いずれにせよ遠巻きに学生達の様子を伺っていた女性達が、ついに近付き、着物に触るという場面であり、少なくとも学生側は彼女達の言葉を解せず、それでも彼女達が袖に見入るにまかせ、おだやかに別れたという場面であったようであり、少なくともこれを書いた学生は、「深いなつかしき」⁶⁸⁾を感じ、何か通じあうものがあったと感じたのというのである。

これらの出会いはこの旅行の重要な特徴であると言える。というのも、何であれ、偶然乗り合わせた酔っ払いの老人と、もしくは着物を触りにやってきた女性達とのこういういったコミュニケーションが可能であったことを軽視すべきではないためである。誤解を恐れず言えば、例えば、切符をなくした朝鮮人を日本人が怒鳴りつける、もしくは侮蔑するというような場面や、朝鮮人の衣服や持ち物を日本人が無遠慮に見る、勝手に触るといったような場面は容易に想像できる。またそもそも、日本の女子学生が酔っ払いの朝鮮の老人とともに相席になる、見知らぬ女性に着物を触らせるということ自体、この旅行の状況一引率者である柳夫妻の姿勢や、あえて言うなら旅行の雰囲気だろうか—が可能としたものであっただろう。もちろん、慎重に読むべき史料であることに変わりはないが、「朝鮮の人々」とどう接しようとしたのか、その一端が伺えると言える。

Ⅲ. 「親しく接する」という経験のゆくえ

3.1. 「朝鮮の人々」とは誰か

以上、朝鮮旅行中の経験について、主に音楽会と人々との出会いという側面

68) ここで言う「なつかしき」は、恐らく「親しみがもてる」、「心ひかれる」(『広辞苑』より)といったニュアンスではないかと推測している。

から、「親しく接する」ということがいかに試みられてきたかを探ろうとしてきた。本章では、その結果として、参加者にどのような朝鮮認識や「自他」認識が生まれたかを、1927年旅行記『朝鮮旅行記』から二本の文章を紹介して、読み取ってみたい。

まず一本目は、K・S氏(以下敬称略)の「感想」であるが、彼女は、「朝鮮の人々に親しく接する」という旅行の目的に対応してか、旅行記冒頭で、どのような「朝鮮の人々」に出会ったかを振り返っている。以下、長くなるが引用する。

高くして青き大空に一筋の煙を送りながら、林檎畑の下に長煙管をくはへてゐた人。／かなり強い秋の陽ざしに白く乾いた土の上にたはいもなく眠り込んでゐた人。／牛よりもなほゆるやかな歩みをもつて、田畑をいぢつてゐた人。／野中の役の木柵にもたれて無上表に我々を迎へ送つてくれた人。／慶州博物館の門前に群れて、私達に驚ろきの目を見はつた人々。／広い街路の両側に一杯店を並べて、ふたしかな価をもつて商売にいそしんでをつた人々——相手を見て価をきめるのは独り朝鮮のみならず、どの地にも見られる悲しい現象なのであるが……
……／又京城の大通りに青年会館をもつて、勇ましくも力強く働いてをる若き人々。／柳先生御所有内緝敬堂にてお目にかゝつた思想深く学問広き方。／私達はこの方々に一体どんな思ひをよせ、どんな願ひを捧げたらよいのであろう。

[略]

私は内地人によつて彼の地の行政のなされることを彼の地の人の為めにも、又我々自身の為めにも心より悲しむものである。朝鮮の地は朝鮮の立派なる人々に治められてこそ最も幸福に朝鮮の天職が全うせられるであらう。⁶⁹⁾

さて、彼女の見た「朝鮮の人々」が、「田畑」「野中」という、言ってしまうと田舎で見た人々、そして市場で見た人々、最後に音楽会のために訪れた青年会館や朝鮮民族博物館で出会った人々という大きく分けて三パターンで書かれていることは象徴的であると言える。彼女の結論は、最後に挙げられた「立派なる人々」が、恐らく一つ目と二つ目のパターンに代表される朝鮮の人々を治めるべきであ

69) K・S「感想」『朝鮮旅行記』 p.54, 58。「朝鮮の天職」の内容についてはとくに書かれていないが、「全人類の為め、世界の為め」という語がすぐ後ろに続くことを付け加えておく。

るというものであり、それとともに内地人による統治に対する否定感を表していることは興味深い。

しかし、そもそもこの旅行の目的であった「朝鮮の人々と自然に親しく接する」という場合の「朝鮮の人々」が、どういった人を指すのかを考えた際に、この文章は示唆的である。というのも、「田畑」や「野中」で出会う人々のみならず、「立派なる人々」に出会うことで朝鮮人が階層化され、規定されていくことを表しているためであり、そこには彼女達の立場性と、言うなれば階級というものが顔を見せるのである。そういったあり方は、恐らく彼女達がそれぞれの場所で「朝鮮の人々」を捉えようとしたからこそ、得ることとなった感覚であったと言えるのではないか。

3.2. 朝鮮を「愛す」ることと、日本人であること

そして、同じく『朝鮮旅行記』から、F・T氏(以下敬称略)の所感を取り上げておきたい。「朝鮮雑感」⁷⁰⁾と題されたそれは、同志社女専の朝鮮旅行において欠かすことのできない柳宗悦の思想を再考するためにも、興味深い論点を示している。

まずその冒頭で、「朝鮮旅行記を草すべく命ぜられ、不本意ながら「然し学生生活をやる以上、自己の意志に反しても命ぜられたことは仕遂げねばならぬ」(p.42)とし、学校の権力下で書かれたものであることを示唆している点からして興味深い。しかしそれ以上に重視すべきことは、この「朝鮮雑感」の前半と後半で、F・T自身の立場性が「分裂」していることである。

先述のように、1927年旅行は2週間の日程で、釜山、慶州、京城、平壤、金剛山を訪れており(音楽会は京城で4回、平壤で1回開催)、F・Tも感想文前半ではその行程に従い旅行記をしたためている。そしてそこでは、朝鮮の自然に触れることで、「美術館なる文明物」(p.47)とそこに陳列される古美術さえ拒否し、「私は野人だ。」(p.47)という言葉とともに自然への回帰を宣言する。そしてそれ

70) F・T(1927)『朝鮮雑感』『朝鮮旅行記』。なお、F・Tの文章はp.42-51の計10ページであり、「京城」部は48ページから始まる。以下、F・Tの文章については、引用文後にページ数を括弧で示すこととする。

とともに、「おだやかな顔の人々」、「やわらかい朝鮮音」、そして「文明化されない純朝鮮的な、即ち自然的な慶州の野を、田家を愛する」(p.48)ことが表明される。つまりこの前半部で彼女は、「私は野人」という自己認識とともに朝鮮を肯定的に評価し、彼女なりの論理で、その「広い野、白い街道、アカシヤの並木、ゆるやかに牛追ふ鮮童〔ママ〕」(p.47)を好み、「愛す」るのである。そうしながらF・Tは素朴にも、「田舎は静かである。亡ぼされた国であることも、支配され、搾取されてゐることも知らず平和である」(p.46)という記述もはさみ、自身の朝鮮を眺める視線を描き出している。

一方で、後半部(小項タイトル「京城」)以降では、その立場性に変化が見られる。まず彼女は、「釜山より一步足をふみ込んでよりこの方、その念頭にプラインド〔ママ。プライドか〕がありはしなかつたか? 支配者的憐憫がありはしなかつたか?」と自身に問いかける。前半部で自身の素朴な朝鮮に対する「愛」や親しみを描いておきながら、後半部ではそういった自己を「支配者としてのプラインド」「支配者的憐憫」「根強い支配者意識」「征服者の被征服者に対するセンチメンタルな同情」という語のもとに批判する。そして「総督府の横暴」という語もはさみながら、「結局に於いて、鮮民衆〔ママ〕とは立場を異にするものであることを強く意識」(以上、p.48-49)するに至っていることは、注目に値するだろう。つまり、本来、「朝鮮を肯定的に評価すること」と「日本人の支配者意識や立場性を問うこと」を「論理的」に結ぼうとすれば、そこに破綻が生じないはずがないのであるが、その破綻をF・Tは、前半部と後半部の「分裂」として描き、「エトランゼー。それが私。」(p.51)と述べ、自己の存在を揺るがすこの朝鮮旅行という経験を、「懐郷の情」を記すことで閉じている。

そしてさらに興味深いことは、彼女がこの破綻に、「京城駅頭に立つたとき」に気づき、「朝鮮人音楽会への出席によつて」、その感覚が一層強められたと記している点である。つまり、冒頭に挙げたこの旅行の目的である、「朝鮮の人々と〔略〕親しく接する」ということがその契機となっているということである。彼女が「朝鮮雑感」で描いた道は、柳宗悦と二つの意味で異なるものであると言える。つまり、一つは朝鮮を「愛す」るから何かをしてあげたいと思い、そうであるからこそ自分は関わるべきではないのだと距離を置くことであり、もう一つは——F

・Tの場合は-「朝鮮の人々と〔略〕接する」ことが、「立場を異にする」という気付きを生んだことである。つまり、「朝鮮の人々」に接し、彼ら彼女らを認識することは、自身にはねかえる認識像であったということである。

柳が目指した、そして同志社女専の二回の旅行が目指した「親しく接する」は、柳自身が埋めえなかった、もしくは気付きえなかった朝鮮への「愛」と支配者側に立つ自身との間の溝を気付かせるに至るものでありえたとと言える。もちろん、柳もF・Tとともに「典型的な植民地」⁷¹⁾観であるといえるかもしれない。しかし、両者の差異を理論化するには未だ至っていないながら、F・Tが「朝鮮雑感」で描いたあり方や表現しようとした「分裂」が突きつける問題は、再考する余地があるだろう。

おわりに

以上、同志社女子専門学校の1925年・1927年朝鮮旅行とその旅行記を手がかりに、「朝鮮の人々と自然に親しく接する」という旅行目的に注目して、植民地観光について考察を行った。

「海外移住」(それは即ち植民である)をすすめるために、「無理解から理解」への旅として設定された近代日本の植民地観光旅行。それは同志社女専の旅行の場合も、十分に当てはまる可能性の高かった意味付けであり、事実、1928年・1930年の朝鮮・満洲旅行はそのようなあり方であった。しかし、柳宗悦・柳兼子が引率を行った1925年・1927年旅行は、そのような方向性とは一線を画そうとしていた。「信頼と情愛のしるし」として柳夫妻が行ってきた音楽会事業に、女子学生達もともに参加し、その過程で、観客であり朝鮮の人々や主催者など、通常の観光旅行では出会えない可能性のある人々と出会っている。そして、柳夫妻の姿勢や旅行自体の目標もあり、言語を介さない、現地の人々との出会いも経験した。もちろん、音楽会の場合は、植民地における近代を表した舞台であったと言え、現地の人々との出会いにおいても、慎重に読むべき点は多く、そ

71) 高崎宗司(1990). 前掲書参照。

の点は強調してもしすぎることはない。しかし、本稿は、それらに対する評価を下す前に、それが可能であったというあり方や、その経験自体が何を生んだかを読み解いておく必要があるという立場から、議論を試みたものである。

Ⅲ章では、その「親しく接する」という旅行の目的や、試みられた様々な経験を通して、女子学生達自身がどのような朝鮮認識、そして「自他」認識を持つに至ったかを、不十分ながら論じた。朝鮮を「自分達の世界」、もしくは日本の延長として見るのではないという視線や、また来ることがあるかという感慨、そして、なぜ自分がここにいるのか(「エトランゼー」という戸惑いは、そもそも、もしくはゆくゆくは、「帝国」にからめとられていってしまうものであったであろう。本稿で取り上げた旅行という経験の細部とともに、無邪気な「親しみ」や戸惑いなども含む、そこで生み出された認識が、いかに「帝国・国民」化へと纏められていったのかを慎重に問うていく必要がある。それこそが、日本と朝鮮半島の関係において観光旅行が果たしてきた役割を明らかにするということであり、今後の課題としたい。

참고문헌

- 서기재(2002)『일본근대 「여행안내서」를 통해서 본 조선과 조선관광』『日本語文学』第13輯, 韓国日本語学会.
- _____ (2009)『기이한 세계로의 초대 -근대 <여행안내서>를 통해서 본 금강산』『日本語文学』第40輯, 韓国日本語学会.
- 中根隆行(2009)『제국 일본의 '만선(滿鮮)' 관광지와 고도 경주의 표상』『한국문학연구』40집, 동국대학교 한국문학연구소.
- 박찬승엮음(2010)『여행의 발견 타자의 표상』민속원.
- 부산근대역사관(2010)『근대.관광을 시작하다』민속원.
- 有山輝雄(2002)『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館.
- 荒山正彦(1999)『戦前期における朝鮮・満洲へのツーリズム-植民地視察の記録』『鮮満の旅』から-, 『関西学院史学』第26号, 関西学院大学文学部史学科.
- 長志珠絵(2007)『「満洲」ツーリズムと学校・帝国空間・戦場-女子高等師範学校の「大陸旅行」記録を中心に-』駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂.
- 高媛(1998)『「大東亜旅行圏」から「郷愁を誘う」旅へ-日本人の満洲観光-』『旅の文化研究所研究報告』7号, 旅の文化研究所.

- _____(2002)『「楽土」を走る観光バス-1930年代の満洲都市と帝国のドラマトゥルギー』 『岩波講座 近代日本の文化史6 拡大するモダニティ：1930-30年代2』岩波書店。
- 金希貞(2003)『朝鮮における柳宗悦の受容--柳兼子の独唱会をめぐる』『社会環境研究』8号。
- 高仁淑(2004)『柳兼子の公演活動と朝鮮における民芸運動』『九州大学大学院教育学研究紀要』第7号(通算50号)。
- 高崎宗司(1990)『「妄言」の原形』木屑社。
- 中見真里(2003)『柳宗悦-時代と思想』東京大学出版会。
- 西村絢子(1985)『学校史にみる高等女学校生徒の修学旅行』『修学旅行』1985年12月号。
- 松橋桂子(1999)『楷書の絶唱：柳兼子伝』水曜社。
- 水野尾比呂志(2004)『評伝 柳宗悦』筑摩書房。
- 柳宗悦・高崎宗司編(1984)『朝鮮を想う』筑摩書房。
- _____(1982年-6巻、1992年-22巻下)『柳宗悦全集』筑摩書房。
- 梁智英(2007)『「文化政治」を歩く柳宗悦-朝鮮文化事業をめぐる言説を手がかりとして-』『比較文学』、比較文学学会、50号。

- ❖ 투고일 : 2010.12.31
- ❖ 심사일 : 2011.01.31
- ❖ 심사완료일 : 2011.07.28